

ウイルスとの共存

北海道

砂川錬心館

中学2年 土田 亮

「早く学校に行きたいなあー」「早く剣道に行きたいなあー」

こう思ったのは初めてだった。今までの長い夏休みや冬休みでも、こう思った事がなかった。二月中旬頃から、北海道内にも新型コロナウイルス感染者がどんどん増えていき、ニュースを見るたびにとても不安になりました。もしかしたら学校にも剣道にも行けなくなってしまうのではないかとマイナスな想像をして不安になっていた。しかし、その不安が現実のものになり臨時休業や稽古が休みになってしまった。最初の頃は、「たくさん休める」とか、「めっちゃめっちゃ楽」と心の中で思いました。しかし、そう思えるのも長くはなかった「みんなと会いたい」「今までみたいに普段どおりの生活に戻りたい」ということを毎日家で言っていた。

ある日、監督から「休み期間だけど今後すぐに稽古に出られるように運動すれよ」と連絡がきた。それから毎日危機感を持って運動に励んだ。外でランニングや素振り、筋トレをし、体力を落とさないよう努力をした。家の中では北海道の有名な先生方が出しているトレーニングや素振りなどの動画を見てその通りに行った。この休みが始まるまでは天気が悪いと素振りをやってなかった。しかし、動画を見ていると家の中でも出来るトレーニングがたくさんあったので参考になった。「この状況だからといって楽してはダメだ」という監督の言葉が心に響いた。時々、剣道の仲間のことが気になったが、「このコロナウイルスが落ち着いて稽古が始まった時にはみんなよりも強くなっていたい」とプラスな想像ができた。六月・七月になりやっと練習ができるようになった。コロナウイルスは怖い。それはわかっている。しかし、コロナウイルスは怖いという気持ちではなくコロナウイルスに勝つという気持ちになったら自然と戦う気持ちがあふれてきた。最初は、ジャージを着て、マスクをつけて筋トレを一時間するだけだった。マスクをつけて練習をしていたので呼吸が乱れることがあったが、練習が始まるまで毎日素振りや筋トレをしていたのであまり疲れはしなかった。それは日々の努力の成果だと感じたので少しほっとした。徐々に、稽古時間や日数が増えて以前のような日々に戻りつつある。しかし、ウイルスの予防に神経をすり減らしている周りや自分がいる。いつになったらこの状態が終わるのか、大会ができない状況の中、剣道

に対するモチベーションが中々上がらないことが事実だ。

しかし、一冊の本が僕の考えを変えてくれた。それは、『大谷翔平二刀流の軌跡』という本である。現在メジャーリーグで活躍する彼を取材する記者が書いたもので、大谷翔平のファンである僕は休校中何度も繰り返し読んだ。その本の中の一文に心を動かされた。それは、『誰しもができるところでやっても何の得にもならない』という言葉だ。「みんなに合わせて稽古すればいいや」、「うまくいったからそれを続けよう」という考え方ではなく、「みんなとは違う工夫をしよう」「難しいことに挑戦しよう」という、出来ないことを諦めず成功するまでやり遂げるという発想ができた。コロナウイルスで稽古が出来る日や時間が制限されてより強くこのことを意識して家でのトレーニングに励むことができた。

このコロナウイルスで起きた休みによって剣道が出来る普通の生活のありがたさを感じることが出来た。悲しいニュースや自分の大切な大会が無くなったことは残念だったが、この経験がなかったら自分の気持ちが変わっていなかったし、生活内容も全然変わっていなかったと思う。この思いを忘れずまだなくなるウイルスと共存しながら、稽古や生活を自分なりに工夫していきたい。